

修身小學

卷五

脇田村迄

T1A1

22

Y 86

吉田利行編輯

版權

所有

# 修身小學

星文館藏版

## 修身小學卷之五

吉田利行編

### 第一章

●凡そ人の子たるの禮冬  
はあたたかにして夏はす  
ずしううたに定めて晨に

省りみる。禮記

●孝子の老を養ふや。其心を樂し。まゝめ。其志に違はず。其耳目を樂し。まゝめ。其寢處を安んじ。其飲食を以て。これを忠養す。同上

●父母長上。教誡することあらば。謹みて。これを聽くべし。妄りに自ら議論すべからず。童蒙須知

●父母の聲を聞かず。父母の形を見ずといへども。父

母の常に教へ誡め給ふこと  
を。須臾も忘るべからず。

日新館童子訓

●父母若し病ひあらば。晝  
夜帯を解かず。他事をすて  
て。看病し。醫藥の事にのみ。

心をつくすべし。

六諭衍義  
大意

●父母のいけるとき。力を  
つくして。孝行すべし。父母  
終はりて。後不孝を悔ゆる  
とも。益なし。

大和俗訓

●孝子は。日を愛しむとい

へること。こゝろに掛くべ  
し。同上

## 第二章

●親類一門多しといへど  
も父母を去りては兄弟ほ  
ど親しきはなしいかんぞ

たろろかにすべけんや。  
中庸 大和

●何れの中も争はざるが  
肝要なれども就中兄弟の  
中は一紙半銭たりとも争  
はざるを先とすべし。  
童蒙 解

●若し兄善からずして。我に非道を加ふるとも。始終第たるの道をつくいて。怨みとがむべからず。六論行義大意

第三章

●我が國は開闢より。今日

に至るまで。君臣自ら定まりて。名分大義既に立ち。君は則ち萬世不易の君にして。臣民は亦萬世不易の臣民なり。名分大義説

●我が國の道の萬國にす

假身小學 卷之五  
ぐれて尊くめでたきこと  
を知りて仰ぎ従ふべし。道守  
之標

●國を憂ひて家を忘れ軀  
を殞として難を濟ふは人  
臣の道なり。文選

## 第四章

●家の主となりては三族  
を親しむべし。三族は第一  
に父の族第二に母の族第  
三に妻の族なり。家道訓  
●親戚をば時々招きて饗



應すべし。志からざれば情  
意うとくなる。同上

○孔子郷村に在りて一族  
の出あひには身を引きさ  
げて唯慎み給ふとなり。聖  
人さへかくの如し。況や常

體の人。毫も驕り慢りたる。  
舉動あるべからず。六論行  
義大意

○親戚は皆先祖の子孫な  
り。貧賤の者を先づ救ふべ  
し。貧賤の者は少しの助け  
にても大に益を得てよろ



こぶものなり。集義和書

○富貴の家に貧賤なる親戚の出入りするは主人の仁愛のあつきことあらはれて其家の面目とすべし。かゝる人の來たるを恥づ

べからず。家道訓

### 第五章

●親と師と敬ふ道理同トければいづれも呼び給ふ時は返事をゆるくせず早く答へてまゐるべし。大和小學

師匠の前に居る時は何にても問ひかけ給はゞ其辭の終はるまで待ちて返答すべし。同上

○物を習ふ時と再び不審を問ひ返す時は行儀を改

めて教へをうくべし。同上

○年わかき者は何事によらず我がまゝに取り行ふべからず必ず家の内の年たけたる人に問ひて行ふべし。同上

仙身八學 卷之五 目録 食  
●尊者の前に侍べる時。又  
は他へ行き。我が上に立つ  
人。來たれば。其坐をたちて  
迎へ。歸りにも。又送るべし。

日新館童子訓

●少者。長者に従ひ行く時

は何にても。長者の持ちた  
る品は。少者受け取りて。其  
勞に代はるべし。同上

### 第六章

●朋友は互にまことあり  
て。たのもしく。表裏なかる

べし。大和俗訓

○凡そ人倫の道。朋友の教へ。誠めのたすけによりて。立つ理なれば。朋友も亦重き人倫なり。同上

○同官同列の人は私意の

争ひなく。人我の隔てなくして。和睦し。相愛すべし。是亦朋友の道にて。君の爲めなり。初學訓

○人の心を知りて。後交はりを定むべし。知らずして

交はれば後悔することあ

り。大和俗訓

### 第七章

○人を愛する者は人恒にこれを愛す人を敬する者は人恒にこれを敬す。孟子

○凡そ愛敬を行ふには信を本とすべし。信なくては人と我との心感通せず。大和俗訓

○人に對して道を行ふに人われに従はずば人を責

むべからず。たゞ我が身に  
立ち反りて求むべし。同上

○人を愛して。人われを親  
し。まずば我が愛の未だ至  
らざる故と思ふべし。同上

○人を禮して。人われに無

禮ならば。我が禮未だ至ら  
ざる故と思ふべし。同上

○我が身輕々しからず。  
て。正しければ。温和なれど  
も。人あなごらず。同上

○何程人にすぐれたるぞ

仙舟山學 卷之五  
智藝能ありても高慢の者は徳にそむける故に凶人なり。和語陰陽錄

## 第八章

○凡そ人は恩を知るべし。恩を知らざれば鳥獸に同

ト。初學訓

○父母に孝を行ひ。君に忠をつくし。師を尊び。故舊に厚くするは皆恩を報ゆる道なり。大和俗訓

○世人或は人の恩を受け



ては記せず。人に惠む所あれば。微物と雖も。亦心にあり。袁氏世範

●人に施しては念ふことなかれ。施しを受けては忘るることなかれ。同上

○凡そ恩を知らざるは世の凡人の習ひなれば。責むるに足らず。我が身かゝる薄き人情にならひて。恩を忘るべからず。大和俗訓

第九章

朝は早く起き。門戸を早く開き。家内の塵を拂ひ。門の内外。庭中を掃除して。皆潔くすべし。家道訓

○居室も。庭中も。常に掃除して。潔くすべし。暗くけが

らはしければ。心氣の養ひとならず。同上

○人の家居は。貧富によらず。身の分より。少く狭まがよし。富貴なりとも。無用の家作。廣くすべからず。同上

○凡そ飲食の物は多少美惡を争ひ較ぶることなかれ。童蒙須知

○味はひすぐれて珍美なる食に逢ひ其品多く前につらなるとも善き程の限

りの外は堅くつゝゝみ其節に過ぐべからず。養生訓

○衣服は儉素に飾りすくなく世の常にしていやーからざるがよし。大和俗訓

○又甚だ質朴に過ぎてけ

がらはしく鄙野なるもあ

同上

○貧しき人もつとめてい

さぎよく垢付まけがれざ

るを用ふべし

同上

○富める人も美麗を好み

無用の服多くすべからず

同上

○大かた衣服のもやうに

ても人の心はたしはから

るものなれば心を用ふ

べし

童子訓

○人の衣服器物の價をはかるべからず。是甚だいやしきことなり。或は人の物ずきをそしるべからず。日新

館童子訓

○人欲は窮りなく。賤産は。

限りあり。限りあるの賤産を以て。窮りなきの人欲に徇ふも。これを節し止めざれば。必ず賤を賤る。初學知要

第十章

●凡そ人は幼き時。艱難苦

勞をして。忠孝を務め。學問を勵ま。藝能を學ぶべ。かくの如くすれば。必ず人にまさりて。名を揚げ。身を立て。後の樂しみ多。童子訓

○勞苦を樂しみ。本業を營

めば。其後衣食必ず餘りあり。口腹をほいまゝに。逸樂を事とすれば。其後衣食必ず貧窘す。天に非ざるなり。人にあらざるなり。自らこれを取るなり。畜德錄

